

【魯迅の描く人物像】に寄せる序

城山拓也

上海の魯迅公園には今も魯迅の銅像があり、大きな池で睡蓮が風に揺れている。彼はそこで何を見つめているのだろうか。

本特集「魯迅の描く人物像」は四篇の文章で成り立っている。この度の「宇野木洋教授退職記念論集」での掲載にあたって、本特集が生まれた経緯について記しておきたい。

本特集はもともと、教科書的な書籍の刊行用に作成した文章が元となっている。二〇一〇年頃、ある出版社の依頼を受けた宇野木先生を中心に、魯迅および作品について解説する書籍作成の企画が立ち上がった。その企画とは、中国文学に関心を持つ大学生や社会人を対象に、新しい時代における魯迅の魅力を提示するというものである。本特集の執筆者は、この書籍作成の一環として声をかけてもらった。

その企画で我々に課せられたミッションが、「魯迅の描く人物像」というテーマで文章を書くことであった。当時の我々は、いずれも大学院を出て間もない新人であった。中国近現代文学研究を志してはいたものの、知識も経験も乏しい。ましてや魯迅の専門家ではない。そんないわば読者に近い立場の人間が作品を読んで見せて、魯迅研究に新しい視点を持ち込ませようという試みである。

残念ながら、企画そのものについては、二〇二〇年現在も頓挫したま

までである。けれども、「魯迅の描く人物像」については、執筆者同士で議論を交わしたり研究会を開いたりして、不完全ながらも形になっていた。

このままお蔵入りになってしまうのもどうももったいない。なんとかして日の目を浴びさせることはできないものか。そうこう思案しているうちに、この度の「宇野木洋教授退職記念論集」のお話をいただいた。

以上のような経緯により、本特集の文章は、論文というよりもエッセイのような趣となっている。繰り返し返すが、本特集の執筆者は魯迅の専門家ではない。したがって、先行研究を丹念に追ったり、実証的に何かを明らかにしたりしているわけではない。むしろ、自分の普段の関心、あるいは専門領域に引き付けた上で自由に文章を書いている。

次に四篇の論文の内容について記す。

本特集「魯迅の描く人物像」所収の文章は、いずれも「魯迅の描く人物像には、いかなる特徴があるのか」という問いに答えようとしたものである。具体的には、縦の軸として、知識人像と大衆像。横の軸として、男性像と女性像。この四つの視点から、小説における人物像の特徴を、多角的に照らし出そうという試みである。

あくまでも一般論として、小説という媒体においては、ある人物像はステレオタイプな人物像を逸脱することのほうが望ましい。頭の良くな

い知識人の方がより人間らしいし、利口な大衆の姿は物語に意外性を与える。女々しい男性は時に読者の共感を呼び、筋肉モリモリで男勝りの女性が登場する小説なども痛快であろう。

知識人は大衆であり、男性は女性である。その逆も然り（あるいは、こうした考え方がステレオタイプなのかもしれない）。

だとすれば、「魯迅の描く人物像には、いかなる特徴があるのか」という問いは、「魯迅の描く人物像には、いかなる揺らぎがあるのか」という問いへとすり替わる。今回の文章で目的としたのも、魯迅の描く「人物像の揺らぎ」に注目し、その意味を検討することにある。

城山拓也「【知識人像】誰のために尽くすのか？」では、魯迅の新文学第一作目の「狂人日記」と最晩年の「非攻」の比較検討を通じて、二〇世紀中国における知識人のアイデンティティの曖昧さについて議論している。大野陽介「【大衆像】キャラとしての阿Q」は、日本人にも馴染み深い「阿Q正伝」を取り上げ、大衆の典型人物＝キャラである阿Qが、大衆としての役割を逸脱している理由を考察している。この二篇のエッセイで前提としているのは、作品において、知識人と大衆という関係性が揺らぎ続けている事態に他ならない。

つづく【男性像】と【女性像】では、いずれも恋愛小説——魯迅唯一の恋愛小説と言ってもいいかもしれない——「傷逝」を取り上げている。城山拓也「【男性像】男から父へ」では、「涓生」という男性から「子君」という女性への啓蒙の失敗に注目し、一方の鳥谷まゆみ「【女性像】少女から母へ」では、女性「子君」が逆に男性「涓生」を啓蒙していた可能性を強調している。この二篇においても、魯迅の小説における人物像が、男性／女性の二項対立に解消できない揺らぎの中にあると示唆している。

本特集を作成する上で改めて分かったことがある。それは、中国近現代文学の中で、魯迅ほど誰もが読む作家はいないという事実である。

中国近現代文学はもちろん、現在の文学研究は対象が非常に拡散している。今や研究者コミュニティであつても、読んで当たり前の作品は少なくなっているのではないか。けれども、魯迅だけは、若い大学生からベテランの先生まで、必読書のカテゴリを外れたことはほとんどない。いや、研究者だけではなく、一般の読書人でも、そして中国語圏はもちろん、日本語圏でも韓国語圏でも、さらに英語圏であつても愛される対象であり続けている。

もちろん、世界中に大量の読者がいるだけに、研究をするとなれば少し敷居が高くなるかもしれない。けれども、世界中の人々の中に、それぞれの孔乙己や、それぞれの阿Qが存在するというのは、なんとも素敵なことではないだろうか。もしかして、韓国の人も酒席で「茴香豆」を前に、孔乙己を思い浮かべたことがあるかもしれない。地球の裏側にいる人も、勝負事で負けてしまった時、阿Qの「精神勝利法」で乗り切っているかもしれない。

魯迅の小説に生きる人々は、あたかも神話の中の睡蓮の妖精のように、こちらから近づけば睡蓮の花へと姿を変える。睡蓮は今もゆらりゆらりと風に揺れている。我々執筆者は無数の読者とともに、同じ睡蓮を見ながら、それぞれの妖精を想像し続けているのである。

※本特集では、魯迅の小説、散文は増田渉、松枝茂夫、竹内好編訳『魯迅選集』（岩波書店、一九六四年、改訂版）から引用した。